心肺蘇生法に神様は必要か？

　先に動いたのは、クレイオスの方だった。

「ふんっ」

　声ともつかない声をあげ、手に持った大剣をゼウスの首目掛けて振る。

　が、しかし――

「――っ？」

　斬りつけた先には、すでにゼウスはいなかった。

　クレイオスも馬鹿ではない。何かしらのアクションがあれば、すぐに気がついたはずで、見逃すなどありえないことだ。

　どこだ、とでも言うように顔を歪めて辺りを見回すクレイオス。刹那、

「神の下に命じます。の爪よ、の槍よ、仇なす者を切り裂き、貫け！　！」

　と、透き通った声が聞こえてきたのは頭上から。

　咄嗟に後ろに飛び退いたクレイオス。瞬間、雷撃を纏った風の槍が、今までクレイオスがいたその場所に落ちてくる。突き刺さった時に起こった衝撃は、まさに突風の如く。

「ちぃっ！」

　おまけに電流が地面を迸るときて、クレイオスは大剣で地面を切り上げ、電流を受け流した。

　直径数センチとは言え、出来上がったクレーターが目に入ってくる。直撃したらと思うと、レイオスの頬が僅かにピクついた。

「……流石は風と雷の神。『速さ』ではかなわぬか」

　目線を数度上に上げると、そこにはゼウスの姿が。足の裏に渦巻く風を見るに、あれで浮いているのだろう。

　理由も無くの戦いで相手から目を離すほど、クレイオスは愚かでは無い。近くに妖精モドキがいたとは言え、ほとんど戦力にはならない故に、クレイオスはゼウスに全神経を集中させていたはずだったのだが……どうやら、ゼウスの方が一枚上手のようだと知る。

　安っぽい言葉だが、どうやらゼウスはクレイオスに攻撃された時、文字通り『目にも止まらぬスピードで』上空に飛んだらしい。

「神の下に命じます。の爪よ、の槍よ」

　三度目の詠唱。その合間に、クレイオスは苦い顔で大剣を構え直す。

　実にワンパターンだと思いはするが、直撃は勿論のこと、躱しても厄介な副産物が襲いかかってくる攻撃となれば、ゼウスでなくとも頼ってしまう気持ちは理解出来る。

そんな攻撃が、斬撃以外に遠距離攻撃法を持たない自分には効果てきめんなのだから、クレイオスは呆れるに呆れなかった。

ゼウスのあの攻撃を防ぐには、クレイオスが思いつく限り三通りしかない。詠唱の合間に突っ込むか、先にこちらの遠距離攻撃で『殺られる前に殺る』か、だ。

だが、どちらを選ぶにも、『速さ』の観点からクレイオスには不可能だった。前者はクレイオスとゼウスとの間に距離がありすぎるが故。

後者にしても、『溜めなし』で斬撃を飛ばせるほど、クレイオスは腕力が無い。先の瞬はただ自分の攻撃を『躱す』ことしかしなかったために、力を溜めることも容易かったのだが、ゼウスは彼とは違うのだ。斬撃を繰り出す頃には、ゼウスも『』なる槍を飛ばしてくるだろう。

斬撃と『』が衝突した時、どちらが勝つかなど火を見るより明らかだ。

となれば、クレイオスが取る手段は一つ。

「仇なす者を切り裂き、貫け！　！」

　刹那、『』が放たれ、クレイオスの大剣が空を斬る。

「――っ！」

　残った手段。それは、『相手の攻撃を弾き返す』ことだった。

　とは言え、普通に弾き返すことは出来ない。否、出来なくは無いが、槍の周りを流れる電流が大剣を伝ってクレイオス自身に流れてしまう。

　だが、電流の守りも完璧では無い。槍に巻きつくように電流が走っているが故、さらに攻撃力の確保故に、側面もそうだが、先端は槍本体がむき出しになっているのだ。さっきの一撃で、クレイオスはそれを確認していた。

　刃の線に、槍の先っぽの点を垂直にぶつけるイメージ。

　結果は――完璧だった。

「ふんぬっ！」

　クレイオスは力を込め、攻撃をゼウスの元へと打ち返す。

　すでにそこにゼウスの姿は無い。しかし、背後から迫ってくる気配を、クレイオスは確かに感じ取っていた。

「甘いわっ！」

　すぐさまその気配に向けて大剣を振るう。接近戦に持ち込まれれば、互角以上に戦えるだけの自信と実力を、クレイオスは確かに持っていた。

　故に確信する。自分の勝利を。

　だがしかし。いやそれ故に、クレイオスは大きな見落としをしていた。

　クレイオスは知っている。ゼウスがあまり長い時間戦えないことを。それが『自魂蘇生術』の制約だからだ。

　なので当然、ゼウスが短期決戦に持ち込んでくると思っていたし、今のゼウスのこの戦い方が、その予想が正しいと証明していた。

　それはある意味正しい。が、同時にある意味違う。ゼウスには時間が無いし、短期決戦に持ち込もうとしているのもクレイオスの予想通りだ。

　だが、ゼウスは決してクレイオスに勝とうとしている訳では無い。これはクレイオスには到底理解できるものではないし、そもそも考えもしないことだ。戦うには『勝つか負けるか』の二通りしか無いと、クレイオスはそう思っていた。

　クレイオスは知らない。『戦力にならない』からといって、必ずしも『戦いの役に立たない』訳ではないということを。

　ゼロのマイナス十乗はほとんどゼロだ。だが、ゼロよりは確実に大きい数字だ。

　ふと、大剣を水平に振るうクレイオスの頭に、ゼウスの言葉が蘇る。

　さして気にも留めずに聞いていて、そしてさも当然のように納得していた、その言葉を。

――『あなたを倒して、仲間を返してもらうだけだね』――

刹那、クレイオスは気が付いた。

この言葉が正しいと何故決めつけてしまったのか。

自分を倒すというのは間違っていないだろう。仲間を返してもらいたいというゼウスの気持ちにも、嘘偽りなどあるはずも無い。

だが、『自分を倒して』から『仲間を返してもらう』という行動の流れ。その順番通りにしてくると、どうして思ってしまったのか、と。

大剣と、ゼウスの掌で渦巻く風が、まさに刀同士のつばぜり合いの如く拮抗している時、不意に耳が引っ張られる感覚を、クレイオスは確かに感じた。

「……っ、き、貴様っ？」

　ゼウスが不敵な笑みを見せつける。引っ張るのが誰であるのか、また何を引っ張っているのか、確認するまでも無い。

「宮殿の……召使っ！」

　妖精モドキが、クレイオスの耳に飾られたイヤリング……いや『ガデスクリスタル』を、引っ張っていた。

大剣は、クレイオスが両手で持っている。大剣に込めた力を抜く訳にはいかない。

　そしてついに……

「――そりゃぁあっ！」

「しまっ――」

『ガデスクリスタル』が、仲間の元へと戻ってきて、

　それが、眩い光りを放ち始めた。